指揮官列伝 第2回

精魂込める創造者

石山建一

［早大監督］

1年目から全日本制覇

現役なのにたびたび勧誘される。「監督やらないか」。

最初はまだ日本石油に入社2年目の66年、現役バリバリのとき。恩師の石井藤吉郎監督からだった。さらに71年。現役をやめるやいなや、再び石井監督がやって来る。その誘いに傾きかけたが、環境は整わなかった。当時の事情で大学に出向してフルタイムで指導することは難しく、会社側も将来の監督の椅子を用意していた。

2年間、セールスマンとして野球を離れたが、石井監督の最後の殺し文句は、

「飛田（穂洲）さんから1シーズンやれと言われ、オレは10年やったぞ」

恩師からの3度目はさすがに断れず、「だめなら実家のいちご園にでも戻るか」と度胸を決め、退社。結果的には国土計画に籍を置き、出向という形で74年から新監督になったが、最初の覚悟を貫き、365日学生と生活して、鍛えていくのを自身のスタイルとした。

当時、部員は120人を超えた。その年、法大には江川卓、袴田英利、植松精一など、進学せずプロ入りしていてもおかしくない選手たちの大量入部が決まっていた。それを知ると、すぐに動く。素早いチーム作りをしないと間に合わないと感じたのだ。

まずはすべて選手を知りたいと、ノックをして素材を見極めた。個々の特性を確かめると、適材適所にポジションを配置転換。バネがあり、身のこなしはいいが肩に不安のある外野手の松本匡史を三塁に、ヒザに不安があるものの強肩の吉沢俊幸をセンターにコンバートした。松本はシーズン最多盗塁記録を更新し、盗塁王に。吉沢も一番打者として5本塁打を記録した。三塁から遊撃手に回った八木茂も打撃ベストテンの2位に入った。3人とも2年生だった。

すると74年の春季シーズンは10勝1敗3分で完全優勝。しかも、全日本大学選手権では駒大を破り通算2度目の日本一といきなり結果を残した。07年、ルーキーの斎藤佑樹がエースとして全日本を制したのは、この時以来になる。

一体感生んだ夏の猛練習

勝っても手綱を緩めるわけにはいかない。かつて石山監督が現役のときもそうだったように、1カ月に及ぶ夏の軽井沢は地獄の合宿になった。

通常ならレギュラークラスなど30～40人ほどが参加する合宿だが、石山監督は部員全員を連れて行った。「早稲田に来た大事な選手たちだし、全員を鍛えてやろうと思ってね。世の中に出たら理不尽なことはたくさんある。そんなことに精神的にも耐えられるようにしてから社会に出てほしいというのもあったし」。

早朝4時から1時間のアップという名のマラソン。午前は8時から昼過ぎまで練習して、昼食後6時まで練習。さらに夜9時から素振りを1時間。これを1カ月以上も続けた。現オリックス監督の岡田彰布は、のちに「1億円もらっても、あれだけはやりたくない」と言うほどだった。

「野球は走ることが基本。強い足腰で土台を作ってから上に入るもの」という石山監督の信念もあり、妥協は許さなかった。

この地獄を部員全員で経験したことでチームの一体感も生まれた。

「まず全員にチャンスを与えて、秋のリーグに向けだんだん絞っていって、最後にレギュラーになるので、なれなかった人も応援する。初めからレギュラーが決まっていれば、そうはならないでしょう」

広がる教え子たちの輪

当時の早大にはスポーツ推薦枠はなく、法大の巨大戦力と差を詰めるのは至難の業だった。

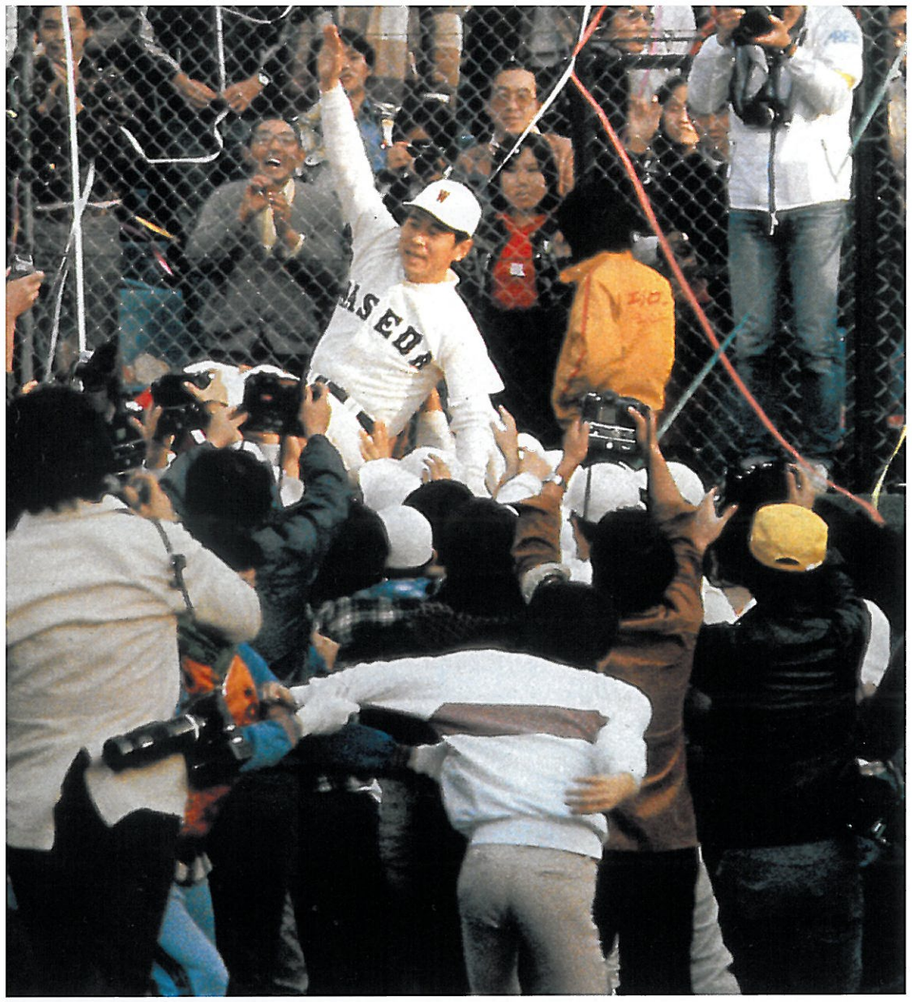
「もともと、猛練習でうまくするのが早稲田の野球です。無名を叩きあげて、強くするという伝統があった」

結果的には最後のシーズンとなった78年度。前年度、巨人軍にドラフト1位指名された山倉和博捕手の抜けた穴は、内野手として入学した金森栄治を起用。レギュラー9人中6人は大学入学時とは違ったポジションで戦い、秋季リーグを優勝した。

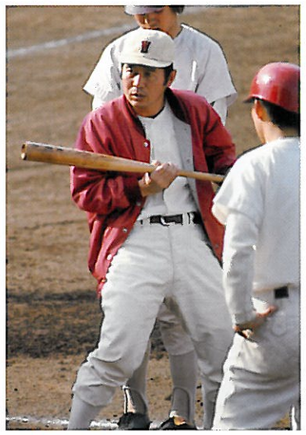
「根気よく手作りして、手塩にかけたチームはいとおしいもの。無名でも育つと思ってくれれば、次の若い世代の選手たちが早稲田を目指してくれる」

指導に個性が出たのはグラウンドだけではなかった。学業を最優先して、可能な限り教職課程を取らせた。全国で社会人、大学、高校の指導者となり活躍している早大監督退任後は指導者の道一筋に。プリンスホテル野球部の創設に始まり、全国の子どもから社会人まで数え切れないぐらいのチーム、選手を教えた。技で相手の力を利用して打つ打撃、組織作りから日常の規律面までさまざまな引き出しを持つから頼られる。

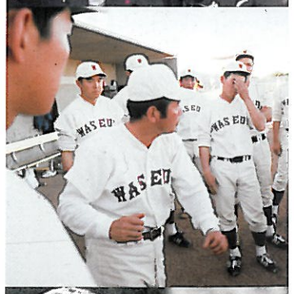
あのとき、まったく指導歴がないにもかかわらず、そういう才能を見抜いていた人もいた。石井藤吉郎監督のすごさもそこだった。

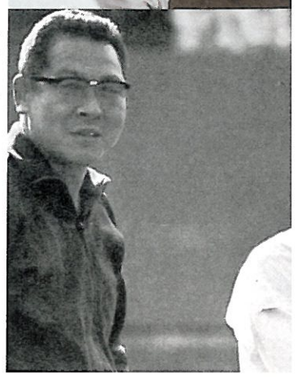


い法大時代に終わりを告げ、王者を取り戻した78年秋。投打ともバランスが取れていたのが印象的だった



PROFILE
いしやま・けんいち●1942年9月6日生まれ。静岡県静岡市生まれ。静岡高3年時には夏の甲子園で準優勝。進学した早大では1年春からベンチ入り、4年春、二塁手として7季ぶりの優勝を果たす。卒業後は日本石油に進み、遊撃手として第1回社会人ベストナインを獲得するなど活躍。74年から5年間、早大監督として126試合、81勝36敗9分。勝率.692。優勝2回、準優勝5回、3位2回、4位1回。79年からはプリンスホテル硬式野球部の創部にかかわり、西武ライオンズの立ち上げ時には球場の設計アドバイザーも務めている。95年には読売巨人軍の編成本部長補佐兼二軍統括ディレクターに就任。現在は全国での講演活動をはじめ、高校生なども教えている。





（上）78年秋季リーグを制して、74年春以来の優勝を成し遂げた。名物の提灯行列では多くの人々に祝福された（中）78年3月には42年ぶりのアメリカ遠征を行い、勝負への執念を植えつけた（下）監督就任1年目、恩師の石井藤吉郎前監督と。6割5分を超える勝率を誇った2人